

今も一つとや…二つとや…などと、数字を数えながら、自分の考えや思いを述べていく数え歌はよく耳にする。表現や伝達の手段・方法が限られていた昔はなおさら盛んだったであろう。

昔の数え歌

多く頭韻を利用して作られるこうした歌謡は、短い中に真実を穿つたり、人情の機微を突いたりしていて興味深い。

そこで今回は、以前引用した羽生永明稿著『南信文学』に載るおもしろい数え歌を紹介する。明治・大正頃の数え歌である。

最初、郡や県の医師会長とともに、郡会議員や県会議員を務めた上久堅の瀧澤清顕（二八五三〜一九三二）作の「衛生数え歌」である。

一ツとや 人のいのち
六ツとや 無病長命
いたすには 第一色欲
つつしめよ
七ツとや 長寿すとも世の中の
ためにならねば人でなし

鎌倉貞男

五ツとや 育児法こそ大事なれ
父母たる者は心得よ

八ツとや 八十八才
越えぬとも 家業はげむは人の役

九ツとや 心のまこと守りつつ
孫曾孫揃って長寿せよ

十とや 徳は仁慈に
利は勸業 是等の基本も衛生ぞ

次は、なかなか機知

に富んだ「数字子守謡」と「五十音子守謡」である。（作者不詳）

一（充）分 育てあぐるなり
百事いちいち 気を

二ツとや 二つとこの世になきからだ
粗末に扱ふ事なかれ

三ツとや 水に空気が身の葉
四ツとや 世の善悪

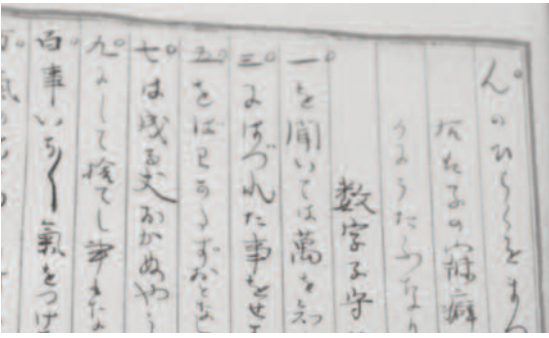
五（業）をわかさず
おとなしく
六（禄）に身を持ち働き

七（質）は成る丈
おかぬやう
八（蜂）は多くの子をもてど

九（苦）にして捨
てし事もなく
十（充）分 育てあぐるなり
百事いちいち 気を

千（詮）なき事をせぬやうに万（慢）
気のころもつときは億（奥）が見ゆるぞ
恥ずかしや
《（ ）の文字筆者》
あいうえお やのひつけ
かきくけこ どもはわきまえて
さしすせそ そうはなきやうに
たちつてと もだちなかをよく
なにぬねのみく
ひきやうきよく
はひふへほ まれをだいいちに
まみむめも のごとおとなしく
やいゆえよ ぶん
のくちきかず
らりるれる んを
せぬやうに

わらうゑを かみへ
ごくらうを
かけじとわざわざべんきやうし
んのひらくをまつぞかし
ほかにもいろいろあるが、これらを昔の人は節をつけて歌ったのであろう。時代の隔たりにあるとはいえ、今に通じる教えもあつてなかなかおもしろい。



数字子守謡の一部